

キリスト告白録第3巻『聖意体現』を読む（3）

「聖意体現」 五 今日一生、六 贖罪赦免

2001年1月21日（東京 新宿）

奥田 昌道

「主の祈」 私を通して 十字架の絶対恩寵 永遠と歴史 終末の光 五 今日一生 試煉と守り 審判と救贖の終末面 なんぞなの？ 天国と地獄の間 パンの問題 毎日の靈魂の糧 空っぽな人間 六 贖罪赦免 十字架の啓示の事実 信行・信交 地獄必定の身なれば 十字架の恩寵の下でゆるす 三重の現在 三つの光
（参考）「聖意体現」 五 今日一生 六 贖罪赦免

●「主の祈」

今日は、「五 今日一生」と「六 贖罪赦免」のところを読んできたいと思います。まず、導入部として初めの14頁に戻ります。ここに「主の祈」が掲げられています。それをもう一度見て、全体をつかまえてと思います。

《マタイ福音書6・9～13（私訳）

一 9 天に在ます私たちの父様！

二 あなたのみ名が、聖としてあがめられますように。

三 10 あなたの国が、来ますように。

四 あなたのみ意が、成し遂げられますように、天においてのうちに、地においても。

五 11 私たちの日用の糧を、今日も私たちに、お与え下さい。

六 12 私たちの負債を、私たちに対してお赦し下さい、私たちに負債ある者たちを、私たちが赦しましたように。

七 13 私たちを試惑につり込まないで下さい。私たちを悪しき者から救い出して下さい。

（附）み国と能力と栄光とは、永遠にあなたのものでありますから。アーメン。

それから、15頁のところ。

マタイ福音書の「主の祈」七項目及び附項は次の如くである。

- 一 父神霊神
- 二 聖名讃仰
- 三 聖国来臨
- 四 聖意体現
- 五 今日一生



六 贖罪赦免

七 神護救済

附 頌栄讃美 》

これまで、「四 聖意体现^{せいい}」まで読んで来たわけです。「父神^{ふしん}霊神^{れいじん}」「聖名^{みな}讃仰^{さんぎやう}」「聖国^{みくに}来臨^{らいりん}」そして「聖意体现」。この四つの項目はいわば神さまに関わることです。

「天^{てん}に在^います私たちのお父様！」（父神霊神）

父なる神、霊なる神。神さまはどんなお方かというところ、「父神霊神」という。そして、

「聖名を崇めさせてください」（聖名讃仰）

まず、「あなたのみ名が、聖としてあがめられますように」と、聖名を讃えます。そして、

「聖国を来たらしめてください」（聖国来臨）

この三つは神さまご自身に関わることを祈る祈りです。そして、四番目の「聖意体现」は天と地をつなぐものです。

● 私を通して

「あなたのみ意が天において成っているように、どうぞ、この地にも私を通して成らしめてください」（聖意体现）

と。普通は、「私を通して」というのは省かれていますけれども。

「聖意が天に成っている如く地にも成らしめてください」

という、やはり神さまに関わることです。

小池先生がここで仰っていることは、これはいわば第三者的に外側から「神さま、そうしてください」と祈っているのではなくて、自分自身を投げ出して提身して、

「この私を通して成らしめてください」

という祈りであるということ。特にキリストにおいてはその角度が強い。もちろん我々キリスト者もそうです。実は「聖意体现」が我々生きる人間の側からすれば、もつとも大事な生きざまである。人間の在り方として最も大事なのは、この聖意体现である。

しかし、その前提として、どういう神さまであるのか。どういうお方に我々は祈っているのか。どういうみ思いをもっていてくださる神さまなのか、ということがこの「一」「二」「三」の三つのところで言われている。ですから、この四つは直接に聖名そして聖国に関する祈りであって、その大黒柱は「四」の「聖意体现」であるということです。この「聖意体现」の前提として、聖国というものは、聖なる神の支配していたもうところである。聖名^{みな}は神の実を表すのが名です。神さまはどんなお方か。聖国^{みくに}というのは、その神さまの霊の支配のいきとどいていて、聖意がそこに成っている、そういう世界が聖国ですから、その聖国を来たらしめてくださいと祈る。

そういう神さまの前に私たち人間の姿はどんな姿かというところ、これはもう徹底的な平伏



しということ。人間は神さまの前に立てるようなものではありませんから、こういう神さまの前にあつてはもう人間の側は、徹底的な平伏しであり、砕けの姿であります。

我々は直接に、平伏したり砕けたりはできませんから、おごそかな審判を棄身の愛で全的に100%受けとつてくださった主イエス・キリスト、そのお方の前に完全に降参する。この絶対愛の、絶対恩寵の贖罪にあずかる。そこに無罪、無私をたまわる。自分はもう徹底的に砕かれてある。イエスの十字架の砕けの場において、自分がすつ飛ばされている。無罪、無私、無我、無の根源現実をもう賜っている――私は今、先生のお気持ちを私の言葉で要約しているんですが――無罪、無私、無我、無の根源現実をもう賜^{たまわ}った。

そういう身であればこそ、そして、「父なる神」の霊と共通であり同質である「子たるの霊」をいただいたからこそ、霊なる神さまに対して「父よ」と呼びかけることができるんだと。これが先生の祈りの前提なんです。ある人は、

「神さまの前にお前は立てるのか」

という問に、その神さまの前に立てないと言つて苦しんでおられた。神さまは審きの神であつて、自分のような汚れた人間が立てようはずがない。十字架で赦してくださいさつても、それは過去の罪は赦されたけれども、今の自分は赦されても、神の前に立てるような自分ではないと。そう言つて悩んでこられた。それに対して、イエスさまの側は、

「もう、お前の罪は過去も現在も未来も、お前の全存在をことごとく根底から片づけたんだから、心配いらんよ」

と。この主さまの御言は単なる言葉ではない。事実なんです。イザヤ書53章で預言されているそのままの姿を主イエスさまはやってくださった。徹底的に罪を赦してくださいさつた。これは「六贖罪赦免」のところに出てきます。そういう本当に徹底的な赦しにあずかり、

「徹底的にもうお前は根底から無いんだ。お前はもう死んでしまっているんだ。旧^{ふる}

き汝は、もう私の十字架で、私が砕かれたときに砕かれた。私が地獄に突き落とされたときに、お前も地獄に突き落とされた。そして、私が甦^{よみが}えったとき、霊体となつて現れたとき、お前の生命に現れたんだ。私とお前とは一つだよ。審かれるなら、お前と一緒にだよ」

と。これが主さまの愛です。主さまの愛というのはそういうものなんです。主さまと一緒に審かれたら、私も満足ですよ。主さまと一緒に地獄に行くなら、私も満足ですよ。この方と一緒に一緒なら、行つた所、行つた所が光に満ちているんですから。愛で全部、変化してしまうんですから。そういうお方と一緒にいる。その場を与えられているからこそ、ちょうどイエスさまが「父よ」と親しく呼びかけられたように、私たちも

「父なる神さま。主イエス・キリストの父なる神さま」

と、そうやって私たちも恐れなく呼びかけまつることができる。

これがなければ、「主の祈」は我々の祈りとしては祈れない。イエスさまは祈られた。し



かし、私たちは祈る前に、立ちすくんで祈れない。ところが、それが大胆に親しく「父よ」と呼びかけられる。そして、呼びかけるのを神さまは待っていてくださる。心が朝顔のようにパーツと開いて大空に向かって、「父よ」「主さま」と言って呼びかけているその姿こそ、神さまは待っていてくださる。だから、その根底はどうしたって、十字架にこざるをえない。しかも、十字架は生命への突破口だったんです。

●十字架の絶対恩寵

私はこないだのマラソン（東京荒川マラソン）で北風を突き抜けて突進した。北風は吹き飛ばそうと向かってくるんです、私を天国から押し戻そうとする。その北風に負けないで、その中に突進して行つて、諸手をあげてゴールインする。そういう姿をさせてくださる原動力は主イエス・キリストの御霊^{みたま}なんです。

小池先生がこの『聖意体现』の中で非常に強調しておられることは、特に無教會的な信仰の中で育てられましたから、それに対して、

「あれは半分だ。後ろばかり見ている。十字架で赦された、あちらの十字架だけを

仰いで、そっちだけを見ている。あれは半分なんで、その十字架で赦されたるが

ゆえに、そこで新しい生命を賜るんだ。その生命は突進させるんだ」

と。北風であろうが何であろうが、それを突き抜けて行くその原動力は生命だ。これを受けとらなかつたら何もならない。それが徹底してこの「主の祈」の全編を貫いている。特に書かれた時代がそういう1954年の頃ですから、本当に先生の転換点で告白なさっているわけです。

私たちは毎回、そのことを先生のお話をとおして聴いてますから、当たり前だと思つていられるけれども、決してそうではない。私のように教會で、しかも宣教師の導いている教會でしばらく育つたというか、苦しんだというか、悩んだ人間にとっては、どんなにこれがありがたいか。皆さんはそういう経験をお持ちでないから、もう初めから小池福音の中にすっぽりと包まれていらつしやるから、多分よくおわかりにならないと思いますけれども。教會は熱心なんですよ、本当にみな真剣なんです。

「死に至るまであなたにお仕えいたします」

という祈りを毎回するんです、今日の338番（「主よ、おわりまで」）の讚美歌のように。けれども、それは人間の思いでは、人間の意志やわが思いではできない。今日そのように思つたつて、明日は変わってしまうのが人間なんです。そして、この現実は厳しい。そんな生易しいものではない。だから、教會で学生時代を過ごした方も、現実の社會に出ていったら、みな挫折したり変質する。それこそ、転向してしまうことが多いわけです。それでも、小池先生を通していただいた福音というのは、正にその冷たい寒い現実の中で、しかもこの身は聖人でも君子でも何でもない、変わりやすい弱い、おこりっぽい、ひがみっぽい、本



当にしようがないような性^{さが}をうちに宿している人間に、

「そのままでもいいんだよ。その代わり、私の前に降参^{さが}しなさい。いや、簡単に降参できないだろ。その降参できない、そのお前の性^{さが}そのもの、我^がそのものをこれを仏教だと「業^{ごう}」と言いますね、あいつは業の深いやつだとか、

その一番汚い、深い、どうにもならんところを全部、十字架で片づけたよ」

というのが、先生の「十字架の絶対恩寵」であるわけです。そこへ来たら、全部ふつとんでいるんです。今日の青空のように、全部ふつとんでいる。まっ白なんです。

「それをあなたにやっただよ」

「はいっ、いただきました」

と。この気合なんです。生命賭けで、本当に生命を十字架に架けて、身体でもってご自身の生命でもって贖い^{かた}とてくださった、勝ち取ってくださった、この無罪、無私、無我、無の根源現実です。「これを与えたよ」と言う。「はい、いただきました」と。そこでいつも主と一つである。その場でのみ、この「主の祈」は祈れるんです。その場で、

「今日一日の糧^{かて}をください。一日一日は、あなた御許^{みもと}から贈られて参ります、プレゼントです。非連続の連続です。明日のことは思いわずらいません。今日一日を生かしてください。私はあなたの御前に何ものでもありませんから」

と祈る。さつき、R君が

「もう死んだって構わないという気持ちでアフリカへ行った」

という話をされた。私たちは、一端は死んだ身です。今生きています。けれども、どこかで行き詰まって、もう死を受けざるをえないぐらいに思いつめた人間なんです。それが

「お前の死ではない。私が死んだんだ。お前は死ぬことはないんだ」

と言って、受け入れてくださったのが主さまですから。そうしますと、私たちはどんな姿であろうが、誰からどんなに非難されようが、そんなことは問題ではないんです。

「私が全部、その非難は受けようではないか」

と。「親分」なんていう言い方はよくないかも知れませんが、このキリスト、主さまという親分は凄い親分なんです。本当に凄い。そのありがたさを、皆さん、本当に日々に受けとってください。

「今日一日をどうぞよろしく願います」

という、その一日はそんな一日なんです。

●永遠と歴史

始めに概略だけ申します。それから先生の本の中に入りたいと思います。

「二日一生」。「本日一生」「今日一生」とも言われます。内村鑑三の『一日一生』という本もありますが、先生がそこで言いたいことは、



「我々の今生きる現実というものは一遍、過去と切断された新しい一日として、神さまの御許から贈られてくる。昨日の続きで今日があるのではない。新しい一日が神さまのみ許^{もと}から、イエスさまのもとから、天界から贈られてくる一日だ」

ということ。「日毎^{ひごと}の糧^{かて}」というのはそういう意味なんです。それは単に食糧という食物だけではなくて、生きる力もそうだとすること。すべてそうなんです。今日在らしめられて生きる、そういう一日で在らせてくださいと。

そして、先生は詩篇の3篇と4篇を引かれます。3篇は朝の祈りです。

「昨日安らかに眠れました。ありがとうございます」

という祈り。そして4篇は、

「今日一日、あなたが守ってくださいありがとうございます。これからあなたの

み懐^{ふところ}の中に休らいます」

という夕の祈りだということを引いておられます。

それから、この「今日の一日」というのは、そういう一日一日は神さまの方から切り取られてくる一日なんだけれども、それが積み重ねられて、私たちのいわば生というものが形造られていくんです。

先生はの中で少し難しい言葉を使って、「永遠の質」「永遠の一日」という「永遠」ということと、それから「歴史性」ということを言われています。この永遠性と歴史性ということ。あるいは歴史性というのを「終末性」と言われます。終末性と歴史性とのからまりが少し難しいけれども。

非常に平べったく申しますと、歴史性というのは我々の見える現実なんです。昨日があつて今日があつて明日があつてという、歴史も遡^{さかのぼ}ればずっと太古の昔から今につながっている、そういう歴史なんです。目に見える、我々の人間がつかまえるでき事、そういったものを「歴史性」という言葉の中で先生はとらえておられる。「歴史」というのはドイツ語でいうと「ゲシヒテ」(Geschichte)と言う。「生起する、事柄が起こっていく」という「ゲシエーエン」(geschehen)という動詞からきています。この「ゲシヒテ」というのは、日々に生起してきたことの総体ということでしょうか。そのようにずっとでき事が昔からつながってきている。個人としても、民族としてもそうです。世界もそうです。そういった出来事、それは全部、社会や民族やいろいろなものに関わっている。

そこに歴史家はいろいろな意味付けを与える。けれども、人間の頭で考えた意味付けというものと、神さまが見ておられる意味付けというものは全然違う。人間はごく限られた面しか見ていない。人ひとりの一生というものだって、いわゆるその人の人物史なんか書かれても、とても全部はつかまえられない。心の中の姿だとか、人に隠されたところとか、そんなものは全然、歴史家はつかまえない。つかめっこない。

それを本当に見てくださっているのは神さまです。その神さまの永遠の光、しかも終末



の光という、向こうから救いが迫って来ているんです。終末の光、それに照らされてはじめて、歴史は意味をもつ。今まで埋もれていたものが、光を与えられて生き返る。まったく名もなき人であるとか、人の知らない——先生は「惨めな努力」と言っておられます——一生懸命にやつたけれども、全然むくわれない。そのまま埋もれていつてしまふ。そういったものに全部、光を与えてくださるのは、神さまの側からの救いの光、愛の光です。それが照らしてくれる。それで初めて歴史は歴史たりうる。どんなに混沌として、無意味に見える歴史であっても、それが神さまの救いの力に支えられて、終末の光に照らされて、初めて歴史は歴史たりうるんだということを先生は言っておられる。

●終末の光

こういう「終末の光」というのは、我々にとっては救いなんです。救いが近いんです。さっきの赦された者、救われた者ですから、いよいよその救いが確かになつて、向こうからやって来る。そういう中に我々はある。だから、個人にとつての死というのはひとつの終末ですけども、その彼方に永遠の生命があります。今既にいただいて、それがもつともつと現実化していきます。死もまた我々にとっては救いです。それから、世界にとつてもこの終末というのは新天新地の希望なんです。

ところが、神さまを何とも思っていないような、神に敵対する人たちにとつては、これは審判さばきです。キリストの審判を拒否して、キリストの受けられた審判を——審判は即ち救いですが、審判を通して救いへということ——それを「ノー」と言っている人たちは、もろに自ら神さまの審判を受けなければならぬ。傲慢に生きた人、人民を苦しめた人、私財を蓄積して豪華な御殿を建てた人——時々、暴あばかれて大統領の座を追われたりしてますね——そういう人たちはバレてもバレなくても、神さまの眼から見たら全部バレてますから、そんなのはひどい審判に合わざるをえない。だから、よく詩篇の中で、

「あなたの義をもて審きたまえ」

と祈っていますが、それはそういうことなんですよ。

「私たちは無力です。権力者たちの前にはひとたまりありません。けれども、あ

なたの義をもつて正しい審きをしてください。それは彼らにとつては文字通り審

きで、我々にとつては救いですから」

という祈りなんです。イザヤ書でも、義と救いとがほぼ同義語に使われています。

「義は速やかに近づき、救いは近づいた」

とか。だから、審判が我々には救いであるし、そうでない人たちには、神さまに敵対する人や、聖意を聖意とも思わない人間にとつては、本当の審さばきになる。また、その審きを通して彼らも救われるんですけれども、ちょっと時間がかかりましょね。我々はもう全部終わっているんですから。そういうことを「終末の光」という中で言っておられます。



そういう我々の救い、あるいは神さまの審き、そういうものからの、そういうものにとつての、現在というものが「六 贖罪赦免」というところで表れてきます。神さまの前に我々は立てないということを、さつきから繰り返し申しました。贖罪赦免というのは、キリストが「主の祈」で言っておられる、

「おいめ私たちが私たちに負債あるものを赦ゆるしましたように、神さま、私たちの負債をも赦してください」

という、神さまに対する赦しと人に対する赦し、その関係を取り扱っておられる。これはなかなか我々にとつてはつらい項目です。「赦しましたように」という。しかし、

「なかなかあいつは赦せない」

と、人間にはあるわけですよ。

「これから赦しますから、どうぞ、先に赦してください」

ならば、まだ祈れるんでしょうけれども。

「赦しましたから、だから、私を赦してください」

と。これはなかなか、他人を赦すことが神さまに赦される条件だったら、この条件は絶対かないつこありません。みんな失格です。ところが、ありがたいことに、

「それはもう赦したよ。お前を赦した。徹底的に赦されてあるということを自覚してごらん。そうしたら、人の罪も気にならなくなる。人に対するわだかまりもなくなるよ」

と。たいそうに「赦す」なんて、そんなえらそうなことは言えない。けれども、

「もういいよ。もうお前のことは思わない。もう私を苦しめなくなった。今までなら、その人のことを思い出すだけでもムカムカするのが、それがもう気にならなくなつた」

と先生は言われました。ヒルティーも言ってます、むずかしいことだと。

「積極的に赦すということはむずかしいことだ。けれども、忘れてしまふんだ。そうしたら、日がたつてみたら、いつしかもうそんなことは気にしない、赦している自分に気がつく。それでいいんだよ」

と。赦すということは神さまにしかできないことだ。人間が人間を赦すことなんてできないことだ。我々にできることは、赦されたる私たちがもう他人をとがめない。「もういいよ」と言う。そういうことなんだということを言っておられます。

●五 今日一生

はじめに全体像を見ましたので、今度は先生の生なまの言葉の方に入っていこうと思います。37頁からです。

《五 今日一生



「^{ひじと}毎日の我らの糧を今日も我らに与えたまえ」(マタイ6・11)

「主の祈」は父神に対する呼びかけを以て始まり、その神に対する^{しやうがい}頌栄をもって終わる。そして、前半において^{みな}聖名と^{みくに}聖国と^{みこころ}聖意のため、換言すれば、「汝」なる神に関して祈り、後半において「我ら」の身体および靈魂の生活、および実存の問題について、換言すれば、「我ら」なる人間に関して祈る。

さて私たちは今や、その後半にはいる。私はここに、第11節の「日用の」と訳されているエピソード(episode)という語を「来る^{くる}毎日の」と訳したい。

この「エピソード」というのは、新約聖書ではここでだけ使われているそうです。「来る毎日の」ということに非常に大きな重い意味をこめて、先生はこれから受けとろうとしておられる。さきほど、詩篇の3篇、4篇のことをふれました。

「われいねて眠りまた目さめたり。ヤハウエーわれを支えたまえばなり」(詩篇3・5)

と、一夜を神のみ懷に抱かれて安らかな眠りから感謝して起きあがった者が祈る祈である。即ち、一日の馳場を走らんとするにあたって、この「主の祈」が、しずかに深くあらたに祈らされる。そして、祈ったように、いのちがけで、一日路を歩き^ぬ貫く。夕には、詩篇第4篇と共に、

「われ平安の中に、いねまた眠らん、われを独りにて^{やすらか}安泰におらしむる者は汝なり」

(詩篇4・8)

と祈って、一切の憂いもなやみも、喜びも悲しみも、われそのものと諸共に、神に投げかけ、空っぽになって、いとも平安(シャローム)に、神の「永遠のみ腕」(申命記33・27)にやすらうのである。まことにその如きが、我らの一日でありたい。然らば我らは、一日一日を一生として暮らすよなき生き方ができるであろう。どんなに涙に暮れることがあろうとも、そのように起きそのように寝る一日一日であるとき、それは真に、内村鑑三先生が言われた「一日一生」が実現して行くであろう。そのときその人は、いつどこで^{たお}斃れようとも、どんなに惨憺たる失敗を喫しようとも、どんなに人々に棄てられようとも、可なりである。神はその祈とその心根と世にも惨めなるその努力のゆえに、彼を^{よみ}嘉し給うであろう。神の^み観るところは、人の判断とは異なる。倒れても、躓いても、一日路の足跡を印して、前進するのみである。》

今読みました終りの4行ほど、これは私はとっても好きでした。私はこの『聖意体現』をいただいたいて、それからずっとそれを心の支えにして来た。それが昭和34年でした。それからほぼ10年後に大学紛争というのが起こりました。その大学紛争が起こるまでの十年間というのは、私にとっての比較的平穏な職場生活でした。学生との間にもトラブルがあるわけでないし、同僚との間にも^{かつとう}葛藤がありましても、いわゆる外側の生活面は比較的平穏であった。信仰面でのいろいろな^{かつとう}葛藤がありましても、それが目茶苦茶になってしまった。あそこで本当



に——戦争の時と一緒にですね——いろいろな人の姿が露^{あらわ}になって表れてきます。自分のことだけに専心する人とか、大学のために身を粉にして働く人とか、いろいろ今まで隠れていたものが出てくる。その時に、私はこのこの言葉を思いました。

●試煉と守り

一体、自分の生き方は何なんだろう。本当に学者として生きるのか、今どういう生き方で生きるのか。人から見たら、バカなことをやっているように見えるかも知れない。見えるところは実に惨憺たるものだ。もつと上手に世渡りする人がいっぱいいるのにと——私はヘタクソですからね——そんな葛藤がありました。でも、集会はきちんとやっています。集会を支えにし、先生の録音テープを支えにし、そして祈りを支えにし、よく若王子山へ祈りに行っていました。そういう中でこの先生の言葉が支えになってくれました。夕の祈は、

「どうぞこれから明日まで安らかに眠らしてください」

と。そして、朝起きたときには、

「主さま、ありがとうございます」

という、そういう一日一日、もう先のことは考えない。その日その日を、本当にその日暮らして、その日その日を精一杯に生きていくという、そういう生き方。一切の憂いも悩みも、喜びも悲しみも、自分自身とともに主さまの中に預けてしまうという、そういう生き方。そして、

《いづどこで斃^{たお}れようと、どんなに惨憺たる失敗を喫しようと、どんなに人々に棄てられようと、可なりである。神はその祈とその心根と世にも惨めなるその努力のゆえに、彼を嘉^{よみ}し給うであらう。》

この「世にも惨めなるその努力」という言葉がもの凄く私の琴線^{きんせん}にふれるんです。これは自分で自分を嘲^{あざけ}っているんですよ。

「お前はアホやな、そんなことをせんでもええのに。もつと賢^{かしこ}い生き方があるじゃないか」

と言って、自分でなかば自分をあざけっている。けれども、自分はそれ以外に何もどうにもできないのが、またこれが自分の質^{たち}なんです。自分はこれしかない。いわゆる世的な評価みたいなもの、世の考え方、それと自分のやっていることのズレの大きさ。自分でもそれはバカだとわかつてる。ヘタな世渡りだとわかつてる。それでいながら、自分はそれ以外にどうしようもない。しかも、誰も認めてくれない。支えてくれない。そんな時にこの言葉の、

《世にも惨めなるその努力のゆえに、彼を嘉^{よみ}してください。神の観るところは、人の判断とは異なる。倒れても、躓^すいても、一日路の足跡を印して、前進するのみである。》



という。本当に皆さん、四面楚歌^{そか}と申しますが、誰からも理解されないときに、主さまの支え、主さまの顧みがどんなにありがたいか。主の思いは世の思いとは異なるんです。

「たとえ全世界に『ノー』と言われたって、私はお前の前に立ちあがって守るぞ。

私はお前の親分だ。お前は私の隠れ家に隠れていればよろしい。戦いは私がやる。

お前は戦わなくてもいい」

と。そういうふうにして守ってください。これが我々の主さまなんです。陽の当たる場所だけにいたのでは、ありがたみはなかなかわからないけれども。陽が射さず、あるいは北風が吹きつけ、雪は降る嵐の中にあるときに、本当に主のありがたみがわかる。それをうちに宿しているときには倒れないんです。人生というのは、不思議なことに必ずそういう嵐がやってくる。

「試みにあわせなくて、悪しきものからお守りください」

と最後に出てきますが、本当に人生は試煉の連続です。その試煉もまた神さまから贈られてくる。試煉と共に守りがある。それを逃れて行く道をちゃんと備えてくださる。だから、我々の一日一日はやはり主さまと一緒に歩く一日一日でしかありえないんです。

あの石田俊弘・裕美が書いた『介助犬が家族になったとき』(wave 出版2000年刊)という本を私は鈴鹿大学の同僚に贈った。その同僚は私より後輩です。京大ではなく、別の大学から来られた方で、私が着任する前からおられた方です。その同僚は私をいつも鈴鹿のホテルから大学まで行き帰りを送ってくださった方で、しょっちゅういろいろな話もするし、一緒に居酒屋で夕食をしたりという、本当にそういうことでよく助けてもらった同僚なんです。その方は

「聖書のことや、先生の本はさっぱりわからない。自分は全くそういうものは受け

付けない体質なんだ」

と言う。もの凄く人はいいいひとなんです。いいひとなんですけれども、そういう神さまの世界のことは全然わからない。

「いいですよ、いいですよ」

と私は言った。そして本を贈った。昨日、葉書が来た。

「家族もみな読んだ。そして、驚いた。本当に悲惨であろう、辛いだろう、苦しいだろう、そういうふうには自分とは思っていなかったが、あの本を読んでみたら、全然ちがう。底抜けに明るい。この強さはどこから来たのか。まるで人に同情を求めるようなことは一つもない。むしろ、そういう生半可な同情を拒絶する凛^{りん}としたところがある。この強さは一体どこから来たんだろうか。それが私にとって不思議でなりません」

と書いてあった。それが今言いました、ここから来ているわけですね。主さまから来ている。裕美はもう完全にキリストに委ねきつていますし、俊弘君も言葉ではクリスチャンとは言



いませんけれども、私から見たらもう立派なもんです。実践していますよ、キリストの御意を。だから、やはりそれで支えられているんです。

●審判と救贖の終末面

では、また本の中へ戻りましょう。

「今日も我らに与えたまえ」

という、この「今日」という語。

《この「今日」という語に、重大な重みがある。この語は文法的には第11節だけのものではあるが、その響きはそのあとの「我ら」にかかわるいのり全体にかかっている。そして、この「今日」の響きは更に「主の祈」の前半にまで反響返しているのである。しかし、これはもう「主の祈」全体が毎朝毎朝祈るそういう祈りだ。「聖名を崇め^{あが}させてください。聖国を来たらしめてください」というのも全部、その「今日」の祈なんだということです。

それは「主の祈」はまことの精神において、来る朝ごとの新たな祈であるからである。つねに「今日」に関わる一日の祈であるからである。我らの毎日は、終末の神の国の到来に直面している。神の国の迫りに向かつての終末的現在の一日一日である。歴史というものは、人間の側の相対面から観て、いわゆる歴史性において、社会の現実を把握しこれに対処して行く面のあることを知る。

これが私が先程申しました、人間の側からずっと生起してくる出来事を過去から現在と未来にわたってずっと見ていく、そういうものを歴史としてとらえている。しかも、我々はその外にいるのではなく、正にその中にいるわけです。私たちは現実には、生そういう社会の中で生きていくわけですから。だから、社会の現実を把握して、これに対処していかねばなりません。いろいろな問題を片づけていかなければなりません。そのために政治がありますし、いろいろな運動もあります。そういうものの中に我々はいくわけですが、それでも、それでいながら、この歴史というものをやはり向こうから、そしてどん底から支えてなかったら、歴史は歴史でありえない。これは混沌であり狂気になってしまう。本当に訳のわからないことがいっぱい起りますからね。そうになってしまう。ですから、「しかし」とここに書いてあります。

しかし、私はそのような歴史面がつねに神の審判と救贖の終末面に直面していることを知る。《

審判を通しての救い。そして、私たちにとっては、審判はもう終わっていますから、もう直ちに最後の審判は救いなんです。終わっていない人にとっては、審判を経てそれから救われるという二段構えになります。そういった、

《審判と救贖の終末面に直面していることを知る。この終末面が歴史面をある角度から、



ある次元から、ある質的浸透力を以て支えているのでなければ、歴史性そのものも喪失されたものとなるのを知る。

これは、「ある角度」と言わないとしようがないですね。「向こうからか、こっちからか」なんて、神さまの角度というのは、45度とか90度とか、そんなことは言えませんが（笑）。大体、向こうの側から、斜め向こうからやってくるんでしょうね。「ある次元」というのは、天の次元でしょうね。天の次元からです。我々のこの三次元ではありません。もう一つ向こうの次元から。それでいて、「質的浸透力を以て」、それがジワッと我々を浸透している。今、支えている。我々の中に宿っている。これがまたありがたい。鉄のカーテンで区切られたり、何かで遮断されて、望まれたる世界であっても現実とは関わりがないというのは困ります。けれども、太陽の光がスーッとしみ透っているように、この終末面というのは、向こうから迫りながら、しかも現在をジワッとしみ透って暖めているんです。どんなに冷たい現実にありましても、太陽の光がスーッと射し込んで私たちを照らし、しかも身体の中にしみ込んで暖め、生命づけている。そういう面があるから、

「ある角度から、異なる次元から、天的次元から、しかも質的な浸透力を以て私たちの中に現に宿するという、これが歴史の中に生きながら終末の中に生きる我々の生きる姿だよ」

と。このように解したら、割合にわかりやすく受けとっていただけたと思う。そして、

神の国はこの祈の前半でも告白したように、二千年前のイエス、パウロ、ペテロ、ヨハネの時と同様に迫っている。

イエスの、「神の国は近づいた。汝ら悔い改めて、天国を、福音を信ぜよ」と仰った。あの、天国は近づいたという第一声、

イエスの宣教の第一声は二十世紀の今日、全くその通りである。二千年の歴史というのは、神の国の到来という畏るべき預言と約束のもとにおいてのみ、その脚光を浴びてのみ、歴史たり得ているのである。もしこれなくば、歴史は全く混沌であり、不合理と矛盾と無意義そのものであって、そこに現じたすべては芝居となる。天国と地獄の中間を動いているこの「不安」と「問題」の世界歴史は、中間という相対性を天国と地獄という絶対性面によって性格づけられているのである。》

最後の審判は、天国と地獄とが別れますからね。黙示録で表れていますように、「第二の死」という地獄があります。それから、

「神共にいまして目から涙をぬぐってください。もはや、日月の照らすを要さず」

という本当の天国があります。この絶対的なものの間に挟まれてるのが我々の現在だということ。だから、その挟まれている中間的な我々の姿に本当の意味で意味付けを与えてくださるのは、その終末を通してしか意味付けは与えられない。その中間を神さまから切り離して、いろいろな意味付けを与えたって、それは空しい。どんなに、哲学的に説明を



与えたって、それは結局は解明にはならないと、私もそう思います。この無意味にみえるこの現在が、本当の意味を与えられるのはその終末の光の中のこと。しかも、それは愛の光である。

●なんでなの？

現代の若者が本当に混沌としている。

「行くところを知らず」

というのは正直だからなんです。私だって小学校の頃は、

「なんで、算数なんて勉強するの？　なんで、こんなくだらないものをやらないといかんの？」

と思いましたもの。中学で

「微分積分は何の意味があるの？」

と。ただ、私はゲーム感覚で答をだすのがおもしろいからやっていただけであつて、

「さて、意味付けは？」

と言われたら、私はやはりわからなかった。なぜ、勉強しなければならないか。

「いや、世の中に出てから必要だから」

と言われれば、

「どんなふうに必要なのか教えてちょうだい」

と本当のところ言いたかった。それを今の子は正直にぶつけているそうですね。小学生に、「なぜ、算数を勉強するの？」と聞かれたら、先生の方が困ってるそうです。何と答えていいかわからない。それは私から言えば、

「なんで勉強するの？」

と聞かれたら、

「なんで生きているの？」

という問と同じくらいに難しいことだと思う。

「先生にもわからんよ、でも、やっているうちにわかってくる。すぐに答の出るよ。うなものは大したものではないんだよ」

と、むしろそう言った方がいいと思う。私にとっていつも、

「なんで、勉強するの？　なんで、司法試験の勉強するの？　なんで、法律学を勉強するの？」

という、「なんで？　なんで？　なんで？」という問いかけが絶えず出てくるわけです。しかも加えて、

「なんで、生きるの？」

と、これが出てくるわけです。すべてに納得のいく意味付けが与えられなければ一歩も進



まないようだったら、私は一步も進めない。

「そんなら、お父ちゃん困る。大学出たら、すぐおまんまをありつけるようにね。今だって苦しいのに」

と。これ以上、家族に迷惑かけられない。私にとつては絶対、大学を卒業したらすぐに自分の生活は自分で支えるという、それでなければ許されない環境だったんです。だから、「なんで、なんで、なんで？」というのは常にかつこの中につつんで、いずれわかる 때가くる。それまで、これはかつこに封印しておいて、今はやるべきことをとにかくやろうと思いましたが。それでやって来ました。

ところが、おまんまの心配が要らないで、お父さんたちが

「お前は一生おれのすねをかじっていたらいいよ」

なんていう家庭だったら、そういう緊張感がありませんから、

「この答が出るまでは、私は進めません」

と、こうなるわけです。これは無理もない。それが大学生くらいでそう言っているのではなくて、もう小学校から始まってしまっている。

「なんで勉強せんなんの？　なんで椅子に坐って先生の話を聞かんなんの？」

「そんなら、学校なんか来るな！」

と追いだせばいいのに、それもできない。義務教育ですからね（笑）。そういうことで、あの意味では今は、小学校からあるいは幼稚園から、子どものときから、「なんで？　なんで？」が表てにもろに出てきてしまった。昔なら、

「つべこべ言うな！」

ガツンと、それで終りなんです。

「文句があつたら出ていけ！」

と蹴飛ばされて、それで出ていいたら飢え死にするしかない。だからもう、いわば上からの権威と言うべきか、権力というか、そういうもので強制的に叩きこんできたわけですね。すぐもう体罰ですから。つべこべ言えば、すぐぶん殴られるわけですよ。そういう中で育った。ところが戦後は、

「ぶん殴つてはいけません。叩いてもいけません」

と、腫れ物に触るような教育になってしまった。そうすると、子どもが自分で自分に束縛を課するということがわからなくなつたわけです。思いのままにやってたらしいということになった。それが今の様なんです。

だから、それを本当に解こうと思ったら、先生方自身が、「なんで？」ということに自身で答えているかどうかなんです。自分は子どもの頃はどうかだったのか。中学の頃はどうかだったのか。どんなふうにそこを切り開いてきたのか。それで今はどうなんだと。

「いや、おまんまを食べるためだけに働いている」



なんて、そんな答では絶対に生徒は納得しません。ということは結局、先生方一人ひとりが真剣に本当の意味の宗教性をもって、現在を永遠として生きる、一日一生として生きる、その生きざま、その姿でもって生徒たちに接して、

「お前たちに私は自分の思っていることを十分に伝えられない。だけれども、こうなんだよ」

と言つて体当たりでぶつかることしか、私はもう道がないんじゃないかと思う。テクニクの問題ではないと思う。勉強するということの意味がわかった人間には、テクニクを教えてやったら、どんどん進んで行きますよ。けれども、意味のわからない人間にテクニクを教えたって何もならない。

また、そういうっても、何もしないで放つておけば、大事なその時期を失しますよね。「鉄は熱いうちに打て」と言います。そういう、大学を卒業するくらいまでの、二十代前半までの人間の一日一日はもの凄く大事なんです。そこで本当に歩んだ者がそのあと花を咲かせていく。そこで土台を築いていなければ、結局は根なし草で終わってしまうかも知れない。本人はそれで満足かも知れないけれども、やはり親として先生として先輩としては、そういうふうに在って欲しくないというのが当然の願いでしょうね。それを単に、

「勉強しないと、いい会社に入れない。こうしないと、後であんたは損するから」

とか、そんな損得勘定は子どもには本当は向かない。子どもに損得勘定を教えたなら、ヘンな大人になりますよ。子どもはもつと、私は純粹だと思う。場合によったら、自分を犠牲にしても何かのために尽くそうという気持ちをもちますよ。そこに生き甲斐を感じるから。ですから、何かそういう生きる手応えに結びつくような、そういうことを大人が示してやらないといけないのではないか、というのが私の思いです。

NHKテレビで『ようこそ先輩』という番組をやってますね。これはみなそれぞれの社会に活躍している人たちが

「自分たちはこうだったよ」

と言つて、自分の母校に帰つて教えるんです。こないだ、ぶんちんさんがやっていましたよ。なかなか楽しかった。ぶんちん(桂文珍、落語家とタレント)さんは自分の話術というものをもつて、自分を表現できない子どもたちが話せるような環境を作つてやっている。あるときは、お相撲さんが話しに行ったり、あるときは、散髪屋さんが話しに行ったり、あるときは、職人さんが自分の職を話しに行ったり、要するに、自分自身をぶつけているんです。それに子どもたちがついてくるという番組ですけれども。

●天国と地獄の間

話はだいたい脱線しましたが、そういうふうには、やはり、現在というものを支えてくれているものは何かということに目覚めて初めて、



「ああ、そうか。深い意味は今ではわからなくても、悪くはならないんだな。いつ倒れてもいいんだな」

と安心できる。我々の一日一日というのは、今日^た仆れるかもわからない、明日^あ仆れるかもわからないという、そういう不安定なものでありながら、しかもまた、ヘタすると百歳まで生きるかも知れない。そういう非常に不安定さの中にあります。計算できない。それが我々なんです。そういう非常にもろい、壊れやすい存在だということ、明日どうなるかわからない存在だというのがわかれば、人間は優しくなれると思うんですね。

本当にあの神戸の大震災（1995年1月17日阪神・淡路大震災）だつてそうでした。そういうことが、規模の大小を問わず、あちらこちらで起こっているわけです。あのオーストリーのスキーの合宿に行ったスキーの選手たちが不慮の事故に遭いましたね。あちらこちらで地震だとか災害の話があります。時と所をわきまえず、いろいろな所でいろいろ我々の思いを超えたようなことが、それが人災であることもあれば天災であることもあります。それが何であれ、我々人間の個という人間存在のところから見たら、はるかに我々を超えた何かの力によって、そんなことが、思わない時に起こっている。それが人間の常なんですね。鎌倉時代の人たちが非常に無常感にさいなまされて、仏教の西方浄土にあこがれた。あれは戦乱の世の中ですから、「生きるも地獄、死ぬるも地獄」という、そういう状況の中で法然や親鸞たちが来世、弥陀の国を説いたわけです。しかも、その弥陀に生まれ変わる道は「南無阿弥陀仏」ということしかない。どんな善行を積もうと、どんなに修養努力しようと、そんなことで自分の身が救われるような生易^{なまやさ}しいものではない。「救ってください」という本願にゆだねるだけ、それが「南無阿弥陀仏」ということだと説いた。それが民衆の間に広まりました。それを支えていたのは無常感です。この世に希望がなかったんです。

今は、見える形では、何かすべてが叶えられるようにみえていながら、しかし、一つ皮をはいでみますと、全く不透明なんです。世界も国も個人も、どうなるかわからないという不安定性の中にあります。事故や災害も規模はいくらでも大きくなります。そういうところだから、我々は同じ不安定要因の中にあるんです。小池先生がここに、『不安』と『問題』の世界歴史』といつてかぎ括弧を付けておられますね。39頁のところに、

《天国と地獄の中間を動いているこの「不安」と「問題」の世界歴史は、中間という相対性を天国と地獄という絶対性面によって性格づけられているのである。しかも、その相対性の中に終末性をそれゆえにこそ付与されているのである。もし、天国をはずし、地獄をはずしたら、この歴史の性格は、喪失され、宙に浮沈して、ゆくところを知らず、意義を失い、処を失う。それは、ナンセンスそのものとなり、人類は狂死し、歴史は空しく、

「空の空なるかな、すべて空なり」（伝道の書1・1）となる。



しかしながら、この歴史面が深刻なる大劇史(オラトリウム)であるのは、天国的光と地獄的闇の明暗の交錯するただなかに、神の顕然また隠然たる靈法の中に支えられているからである。誰か人類の歴史を完全に解明し得んや。これは永遠に不可能である。その解明の鍵は、独り神のみが握っていまし給う。そして、キリストは現に今、天上に在って、その権をゆだねられて在まし給う(コロサイ1:15-17)。

一人の生涯は、これをいかなる卓抜なる伝記記者といえども、これを完全に描き、その意義を究明しえない。そのように、人間の実存に関わる事態は、神の前におごそかなことであって、人が他人の実存を軽々しく云々し得るものではない。そして、我らはみずからの実存すらも知りつくしえない。そして、我らの生涯はそのような偉大なる神の歴史の一環として、時代史の一コマ―コマをなす因子である。私たちの生涯の一日一日がそのような終末性において、非連続の連続として迎えられ、また送られてゆく。

それゆえに、「エペウシオン」という新約聖書で唯この「主の祈」(ルカ伝も然り)にしか出て来ない語を、以上の如きの、つびきならぬ角度からとらえるときに、これを「来る日ごとの」と訳して可いのである。神の国を来たらしめんとして、神の国の永遠時が、終末の世界から来る日である。何たる祝福と希望の語であらう。そういう一日一日が送られて来る。そのようにして、「来る日ごとの」我らの糧を「今日も」と祈るとき、終末的現在としての今日に現実^{ハル}に在らしめられているのを感じる。のみならず、「今日」という時は、聖書の中から「元始」としてまた「終末」として送られて来たことを。》

先生は「聖書の歴史観」ということを書いている。聖書は、必ず始めがあつて終りがあると決して、どこからともなく現れて来てどこへともなく流れて行つて、果てはわからないという、そういうのんべんだらりではない。必ず始めがあつて終りがある。始めは、

「神、太初^{はじめ}に天地を創^{つく}りたまへり」

という。そして終りは黙示録、

「我、速^{すみ}やかに来らん」

という。そういうふうになきちんと完結されている。そして、質的にはいつも、その始めという性質と終りという性質を帯びている。それが「今」なんだというふう先生はとらえておられる。

● パンの問題

それから、その次から少し話題が変わります。パンの問題です。「主の祈」の中で、イエスさまがまず神さまのことに関わる祈りを示され、その次に人間の側の問題になったときに、まず罪の問題をとりあげて、

「神の前に立てない私たちの罪をお赦してください」



と祈ってから、赦された人間にはじめて、

「今日、毎日のパンを下さい」

と、こう祈るのが道徳的に言えば順序ではないか。ところが、罪の問題をさておいて、

「まず、パンの問題を祈れ」

と言ったのは深い深い憐れみがある。神学者や聖書学者ではとてもこんな発想は出てこないということを書いておられる。そして、イエスご自身がその荒野の試みで、非常にこのパンの問題がいかに切実かということをもつて味わわれた。だからこそこのパンの問題をまず祈るようにと、我々に諭^{さと}してくださった。この思い遣^やりの深さに涙がこぼれると、そういうことを書いておられる。たしかに、イエスさまはあの荒野の試みで四十日四十夜、御霊に導かれた。しかも、聖霊を受けられてからです。聖霊を受けられてから、御霊に導かれて荒野で試みにあわれた。飢餓のどん底においてサタンがやってきて、

「お前は神の子だったら、この石ころをパンに変えてみる。お前だったらできるだ

ろう」

と。その時に、

「人が生きるのはパンだけではない。神の御口^{みくち}から出る一つ一つの言によるのである」

という申命記の言でもつてお答えになった。そのくらい、その神の言という霊の糧、神の言、それが人を生かす。たとえこの肉体は朽ち果てても、その霊の糧である神の言、霊言、この生命をいただいているものは永遠の生命者であるということを経^してキリストは立証された。しかも、そうやって生きる者を決して神さまは捨ておられない。日用の本当の肉体を支える糧をもきちんと備えたもう。

ギリシアなんかでは「靈魂不滅」ということを言った。けれども、逆に肉体を粗末にするんです。靈魂だけが大事だ、肉体なんかどうせ朽ち果てるものだ、そんなものは相手にするなと。よく、そういう宗教があるわけです。この肉体とかそういうものを軽蔑する。

「罪を犯させるものは肉体なんだから、こんなものは徹底的にいじめつくせ。そして、靈魂だけ永遠の世界に行くぞ」

というのがあつた。けれども、キリストの福音はちがう。霊肉渾然たる救いなんです。これが素晴らしい。やたらと難行苦行せよとは仰らない。パウロなんかむしろ言ってます。

「難行苦行すると、いかにもそれは霊的に見えるけれども、それは^{ほしいまま}慾なる肉の欲を防ぐのに何の役にもたない。断食する。婚姻を禁ずる。食を禁ずる。性を禁ずる。そして、いかにも敬虔らしい、宗教的な生き方をしている。こんなものは偽善だ」

とパウロは言っている。神さまは我々に霊肉渾然たる救いを備えていらつしやる。第一、人間をお造りになったときに、男と女に造られた。そして、



「産めよ、増えよ、地に満てよ」

と言つて、結婚を、そういう男女の営みを祝福された。それが、神さまはちよつとたくさん与えすぎたのでしょうか、逸脱が起こってしまうけれども。本来は祝福だったんです。そういう祝福を祝福の中に正しく導いていく、これは御霊の導きにゆだねていくということでありましょうけれども。そういうふうにして、イエスさまは決して我々をへんな宗教的修行者にしようとはなさらない。あるがままの我々があるがままの姿で、そして日々神さまから与えられる恵み——これは肉体の糧であり、靈魂の糧であり、恵みそのものです——それをいただいて、日々に、一日一日を歩いていくという、そういう生き方だよということこれから仰るわけです。

●日毎の靈魂の糧

42頁のところにとびます。聖書の言をみれば、

「まず神の国と神の義とを求めよ、然らばすべてこれらのものは汝らに加えられるべし。」(マタイ6・33)

とか、あるいは、

「汝心を尽し精神を尽し思を尽して主なる汝の神を愛すべし。おのれの如く汝の隣を愛すべし。律法全体と預言者とはこの二つの誠命に拠るなり。」(マタイ22・37-40)

とか、そういうふうな祈りのことが言われている。そういうことが言われているながら、《しかもなお、イエスは靈肉不可離の実体としての私たちの存在をかえりみて、糧の問題のために祈ることを、罪の問題よりも先にゆるして居られる思いやりの深さを、思わざるを得ない。神学者たる当時のパリサイ的教法師たちであつたら、これは順序が逆である、まず罪の解決を先に祈らねばならぬ、と青すじを立てて論議するであらう。そこが神の子、み霊の人とあたまの神学者とのちがひである。》

とこういうことを言っておられる。主は罪を論ずる前に罪を荷つてしまつておられる。罪を贖つてしまつておられる。愛を論ずる前に愛してしまつておられる。イエスさまの在り方、姿、行為、これは全部言葉よりも先に、現実が出てきてしまっているんだと。

それから、現実にはパンのために苦しんだ人たち、そういう人たちの姿をゲーテの詩やダントエの詩から引いてこられて、43頁の終りから4行目、

《流浪の旅幾十年を、「枕するところなき人の子」の勇ましき僕として戦い抜き、『神曲』一卷を以て世に對し、神に控訴した詩人は、苦飯の味を嘗め尽くしたのであつた。このダンテを特愛したわが恩師藤井武先生が、いかに神信頼のその日暮しをしておられたかを、私はつぶさにこの目を以て見て知っている。先生もまた

「何を食ひ、何を飲み、何を着んとて思い煩うな。……明日は明日みずから思ひ



煩わん、一日の苦勞は一日で足れり」(マタイ6・31…34)
を實現していた人であった。

いうまでもなく、イエス御自身、徹底的に天父に信賴して一日一日を歩かれ、この祈を祈として生きておられた。そして、その真意は実に信賴の生活であつて、ただパンの問題というのではない。現實に切實な問題であるパンのことであるからこそ、それが功利となり打算となり私欲となる罪性を誘発しやすい。このことが極めて大なる事態であればこそ、イエスは神、信賴の魂の在り方をこの祈で示しておられるのである。されば、イエスの深い思いやりには、また深い諭しが秘められているのである。神は現在し給う。その現在面において神に在る生活。その日その日を、神の御はからいのもとに生かしめられてゆく生活。かくして、パンの問題もまた、実にそれ自体が具體的に信仰問題に関わる。否、じつに信仰問題たり得るのである。信仰とは実に實現にかかわる事態であつて、単にあたまのこと、觀念のことでないことを、この一事からも知らしめられるわけである。》

とかく、社会の現實の問題と神さまの世界に関わる問題とを切り離して考えるひとが多いけれども、そうじゃない。我々の生まの現實の中でこそ本當にキリストが現れてくださり、キリストは力をくださり、解決を与えてくださる。この角度なんです。これは「パンの問題」と言っておられるけれども、私はもつと広く我々の生活そのもの、職業も家庭も、そういった我々が現に生きているその場に御霊の御力が働いて、そこで問題を解決して下さって、解決ならざる解決を与えてくださる。一日一日を押し出していつてくださる。支えられていく。引つ張つて行つていただく。この祈りなんです。この

「日毎の糧を今日もお与えください」

というのは、今日一日を生きる力を与えてください、今日一日、私にふりかかってくるいろいろな問題をどうぞあなたがみ力をもつて解決し導き進ませてくださいという、そういう祈りだ。そういうふう^{みこころ}に受けとつていききたいと思つています。

そのようにして神に信賴し、神に在り、キリストに在つて生きる者には、もう一つ高次の食物が与えられる。それは何だろうか。そこで、サマリヤの女との語らいのところを引用して、弟子たちが食物を町に買いに行つて帰つてきたら、イエスが、

「我には汝らの知らぬ我が食する食物あり」

と言つて、弟子たちを驚かした場面がありますね。

「われをつかわし給える者の御意^{みこころ}を行いその御業^{みわざ}をなしとぐるは、これわが食物なり」(ヨハネ4・34)

と。つまり、聖意体现ということ。イエスさまにとつては、救いの大業、我々を贖つてくださるというイエスさましかできない、その御業がイエスさまにとつての靈の糧である。私たちもまた、御意を行ずるという、それが私たちの魂の糧です。そうであつて欲し



いということですね。

●空っぽな人間

それから少し飛ばしまして、46頁へ行きます。

《主、キリストよ！》との一念のもとに、直ちにキリストが入り来って生きる^{から}空っぽな人間でありたい。

つまり、蓄え^{たくわ}はしない。明日のことを思い煩っていろいろな蓄えをするということではなくて、一日一日生かされ、一日一日贈られてくるものによって生きるのですから、本来は無一物的な生き方です。現実にはそうはいきませんよ。でも、気持ちの上においては、「これだけの蓄えがありますから、神さま、もうあなたに頼る必要はなくなりまし
た」

ではない。

「蔵を建てて、食物をそこへしまいこんで、一生安楽に暮らそう」

と言ったら、神さまに

「お前は今晚、魂をとられるんだよ。自分に対して富んで、神に対して富まぬものはわざわざいだ」

と言われました。

「それは、有れども無きが如し。神さまが備えてくださったもので、自分のものではない」

という、私しないという自覚です。必要だったらいろいろな人のお役に使ってくださいという自覚です。有れども無きが如くということ。そして、先生は最後に

「信仰すらもそうだよ」

ということをここで言っておられる。信仰も蓄えておかねばならない信仰だったら、くたびれてしまう。空っぽでいいんだと。

『主さま！』と祈ったら、パツと入ってくる。『主さま！』という一言の祈りで満たされてしまう、そういう在り方で生きたい」

と、これが最後で言っておられるところです。

「主、キリストよ！」との一念のもとに、直ちにキリストが入り来って生きる空っぽな人間でありたい。またキリストの前にぶつつぶれた人間が、どうして何者かであるうとしようか。とんでもない。それこそ傲慢である。何もありません！と、それでこそ私は本当に楽である。聖霊は空っぽのところに来て宿り給い、留まり給う。信仰というものは、それを蓄積しなければならなかったのであつたら、律法への逆戻りにほかない。《

皆さん、楽になられたと思いますよね。本当に、日毎の糧です。そういうふうにして、



信仰すらも蓄えるべきものに非ずということです。

●六 贖罪赦免

では、その次の「贖罪赦免」というところに入ります。

《六 贖罪赦免

「我らに負債ある者を我らのゆるしたる如く、我らの負債をもゆるし給え」(マタイ 6・12)

前述したように、「糧」に関する祈は直接には肉体の死活に関わることであったが、この「負債」に関する祈は直ちに靈魂の存亡に関わる祈である。「主の祈」の前半において、その中心部が「汝の聖意をなし遂げたまえ」にあるとするなら、この後半に於ける核心部は「我らの負債をもゆるし給え」にあるといわねばならぬ。「主の祈」は正に二焦点をもつ楕円形の如きである。それよりもむしろ、同円二中心といったようなものである。しかも、その二つは相かきなり、金的の前面は「汝の意志の成就」であり、金的の背面は「我らの負債(罪過)の赦免」である。

さて我らがこの祈を読んで、ぶつかる躓きの石は、原文では後半になっている

「我らに負債ある者を我らのゆるしたる如く」

の句である。》

「ゆるしたる如く、ゆるし給え」なら、「ゆるしていなければ、ゆるしてもらえない」と、こうなりますからね。だから、これが大変です。

少し飛ばしまして、47頁の終りのところ、

《ところで、この「ゆるし」は

「ゆるしたる如く、ゆるし給え」という、こっちの側のゆるしですね。「私がゆるしました」とく」というこのゆるし、

はたして可能であろうか。表面的にはゆるすことはあっても、真に「ゆるす」ということは、我らが真に「ゆるされた」ことなくしては、できない内的行為である。我らの罪過はしからば、いついずこにおいて、真に、根源的に、根底から、ゆるされたのであるか。幸いなるかな、我ら新約の時代に生きる者は、キリストの十字架によってその罪は完全に処分された。

「^{うらみ}怨なるへだての^{なかがき}中垣はこぼれた。」(エペソ2・15)

「十字架によりて怨は滅ぼされた。」(エペソ2・16)

のである。神との関係において、「怒りの子ら」であった我らは、

神の怒の対象である子、つまり神の審判の対象であった子。そういう我らは

「平和の子ら」「光の子ら」にされたのである。「悪魔の子」から「神の子」にされたのである(ヨハネ第一書3・10)。我らはもとその「不虔と不義」の、神に対し人に対しての、



縦横の罪過により、

神に対しては罪、人に対しては過ち、とこういうふうに分けておられるんですね。

「神の怒」^{（いかり）}（ローマ1・18）の下にあった。そして、神の怒からは、今でももし十字架の下にいないならば、まぬがれ得ない罪びとである。死に至るまでそうである。

神は我ら罪びとを深くあわれみ給う。それは大悲霊願的なあわれみである。深くして潔い完全なる救へのあわれみである。かのキリストの十字架において、その極致として、唯一回的に決定的に、最も具体的に、神のゆるしをあらわしたもうたのである。神の怒は神のゆるしに、キリストにおいて転ぜられた。そこに神の怒の中にかくされていた神の深いあわれみがあらわれた。神の怒（義）は神のあわれみ（愛）の「異なるわざ」（イザヤ28・21）であるとは、ルッターの指摘した通りである。かかる十字架による罪のあがないが、神のゆるしであって、単なるゆるしではない。》

つまり、犠牲を伴っているということですね。何の犠牲もなくてただ「いいよ」と赦されているのではない。羔羊^{（こひつば）}キリストのあの尊い犠牲のゆえに貫かれた赦しである。あの羔羊の犠牲に支えられた赦しである。あれあるが故に赦しは永遠なんだよと。もし、あの支えがなかったら、今日の赦しはあつても明日の赦しはないかも知れない。でも、あの一回きりの永遠の贖い、あの羔羊の犠牲、それがあゆえに我々はもう過去・現在・未来、永遠にもうそこで赦されてしまった。贖われてしまった。

●十字架の啓示の事実

《そのようにして贖いゆるされた者である、というのが、我らの信仰の現実である。我らはかく、十字架の啓示^{（けいじ）}の事実によって、即ち恩寵の力によって罪「ゆるされた者」という完了態にある。》

ここに「十字架の啓示の事実」とあります。この言葉にもちよつと気をつけていただきたい。十字架は歴史的な事実です。多分、歴史の本に出てくるでしょう。歴史的事実ということは誰もが認める事実ということです。現に起こったことです。列車が転覆したのと同じです。地震が起こったのと同じです。倒れなかった何かの下敷きになって死んだというのも歴史的事実です。そういう、イエスさまが十字架にかかって死なれたというのも、そういう意味での歴史的な事実ではあるんです。これはどの歴史家もみな認める。

けれども、それがこのような、今まで小池先生が語ってこられた深い意味において、我々の罪過の根源的赦しであるという、贖いの意義を秘めているという、これは歴史には出てこない。これこそ「啓示の事実」です。「啓示」というのは、神さまが自分のみ思いを示されるのが啓示というわけです。これは聖霊でしか受けとれない。これを本当に受けとるのは御霊です。御霊を宿したひとが本当に受けとる。

「いや、御霊は十字架を受けとらなければ、御霊は来ない」



と言ったら、永遠のどうどう巡りになるけれども。これは神さまの世界というのは不思議です。ハツとうたれた時には同時なんです。ハツと気づかされた時は、それは聖霊の促しであると同時に、十字架を受けとった時に聖霊が宿りたもう。そういう、アツという、赤ちゃんが生まれるときも、アツという出来事として生まれてしまう。そのように、我々が新しく生まれるということも。難産かも知れませんが、なかなかそこを突き抜けられないかも知れません。オギャーと生まれてくるのは、なかなかそれまで大変かも知れません。産みの苦しみがあるかもしれません。

「けれども、生まれたら、一人のひとが生まれたという喜びと平安があるだけだ」とヨハネ伝に書いてありますように。

この十字架の神さまの愛の迫り、これは日々に我々に迫ってきてくれているんです。あの歴史的な事実を啓示の事実として、これは永遠だよと。

「あのゴルゴタの木の十字架は朽ち果てても、天に輝いている赦しの十字架、愛の十字架は今も輝いているよ」

と。それを我々の心に示してください。これが啓示の事実としての十字架なんです。だから、歴史家が何と言おうと、賢い人が何と言おうと、

「十字架の言は滅びゆく者には愚かなれど、救いにあずかる我らには神の力なり」

と。人の智慧をもつて十字架を認めることはできなかったと、ちゃんとパウロは言っているんです。あの当代随一の知者であったパウロがひっくり返されたのち、

「知者いずこにかある。学者いずこにかある」

と呼びかけて、

「この我々愚かなる者を、無きに等しき者を救いたまへり」

と。それは正に、あの賢い者が、愚かだと言って嘲る十字架、これを救いとして受けとる我らにおいて、それは成就したんだよと。そういうことを、たった一言の「十字架の啓示の事実」という言葉の中に秘められています。そして、それは神の側の恩寵の力、本願の力によって罪ゆるされた者という完了態、それが我々の現在だということです。

●信行・信交

《それを現実に信受して「ゆるされてある」者となった。そのような現実を受けとること、突入することが、信仰であり、信行であり、信交である。》

こんな時からこの言葉を使っておられるんですね。私は「信行」「信交」という言葉は晩年にお使いになったと思ったけれども。「神交」はさすがに出てきませんけれども、「信交」はもうこんなところに出てきています。

かく根底からゆるされた恩寵の中にある時にして、はじめて、我々は隣人の罪過をゆるすことができる。勿論、人の罪をゆるし得る者は神のみである。キリストのみで



ある。我らが「ゆるす」という意味は、むしろ隣人の我に対する関係において、その罪過の面をゆるして見ないという気持ちである。

「もう、いいよ」と見逃してしまふ。そういう気持ちである。心にとめないということ。このように神にゆるされた私なんだから、君、心配は要らん。みんな君のやったこととはゆるすよ、ゆるしたよ。僕のもゆるしてくれたまえー！」

という心根である(しかし、どんなに人間相互でゆるしあっても、根底的なゆるしを神から直接キリストにおいて受けない限り、駄目である)。

それから、福音書のあの「罪ある一人の女」(ルカ伝第7章)の話を引かれまして、

「五十デナリの負債がある者と五百デナリある者と、貸主は両方をゆるした。両方ともどっちも返せなかったので、両方ゆるしてやった。どっちが多く愛するだろうか」

「それは五百デナリゆるしてもらった方ですよ」

と。それで、キリストはシモンという人に向き直って

「シモンよ、この女を見てごらん。私の所へ近寄って来るときに、もう扉をあけたその時から涙ぐんでいたではないか。寄ってくるなり、髪の毛を涙で濡らして私の足を拭^{ぬぐ}って、そして接吻してくれた。香油を塗^ぬってくれた。あなたは足を洗う水も用意してくれなかった。接吻もしてくれなかった。多くゆるされたのだから、多く愛するんだよ」

「多く愛する者はそれだけ多くゆるされているんだよ」

ということを言われたあの場面です。

●地獄必定の身なれば

そして、「償いかたなき罪びと」という言葉がでています。

「償^{つぐな}いかたなければ、債主^{かしのし}この二人を共に免^{ゆる}せり。」(ルカ7・42)

とあるように、私たちは神さまの前にあつては、「償いかたなき」罪びとである。親鸞^{しんらん}もそう言いましたね。

「もし、なんらかの修行をして、それで償^{つぐな}えるものなら結構だ。それで天国へ行けるなら結構だ。私は所詮、地獄^{ひじょう}必定の身だ」

と言いました。つまり、「償いかたなき罪びと」だと親鸞は言ったんです。

「それが救われるのは、弥陀^{みだ}の本願^{ほんがん}、救ってやるぞというそのご本願にすぎるしかないんだ。いかなる行も及びがたき身なれば、親鸞にあつては念仏を申すことのほかに子細^{しさい}なし」

と言いました。しかも、その

「念仏を称えたらいいんだよ」



と言ってくれたのは法然ほうねんです。

「この法然上人にすかされまいらせそうろうとも——もしそれがうそであったとしても——自分にはいさきかも悔いはない。もう、他にはいきようがないんだ。所詮、地獄ひつじょう必定の身なれば」

と。そこまで親鸞さんの場合は罪の自覚が深かったんですね。そして、親鸞の姿は、まず妻帯しました。人間のあるがままの姿をそのまま受けいれたんです。

「自分はなにもみんなと変わるところはない」

と。そして、行脚あんぎゃして行きました。行った所、行った所で、そこで土着の人と同じように交じり、畑を耕し、一緒に生活したんです。

だから、本当に自分は償つぐないかたなき罪びとだということがわかり、そのことがもう100%ゆるされている、そして、

「あるがまま、そのままでいいよ」

と言われている人間にして初めて心が安らかになり、おおらかになり、すべての人を受け入れ、ゆるし、人のために祈る。罵ののしる者のために祈る。そのゆとりが出てくるんです。

「ゆとり教育」というのはそのことなんです。心のゆとりというのは、本当に神さまとの関係で、

「お前のことは全部わしが引き受けて、問題はない。必要なものは全部あげるから心配いらん」

と。どんどん上から流れてくる。そうすると不思議と人さまからもまた流れてくる。豊かでしたかたがないから、人に対して優しくなれる。

「こんなに徹底的にゆるされているんだから、そんな人のことをとやかく言えたものではありませんよ。もういいです。思い出せば腹がたつこともあるけれども、忘れますよ」

と（笑）。そうなんです。

●十字架の恩寵の下でゆるす

そういうふうにして、

《我らはすべて、例外なく、神に対して「償いいがたなき」罪びとである。自ら何とも償いがたなき者を、キリストが罪の「証書を塗りけし、これを中間よりとりて十字架につけて」くださったのである（コロサイ2・13～15）。かくて償われ、贖あがなわれたのである。そのようにして「ゆるされた」我らであるから、隣人をその十字架の恩寵の下で、「ゆるす」ことが始めてできる。》

だから、

「我らがゆるしました如く、おゆるしください」



と言う前に、

「もうあなたは根底からゆるしてくださったから、そこで私はもう隣人に対して恨みをもっていない。ゆるしています。だから、たとえば日々私がまた過ちをおかすことがあっても、どうぞおゆるしく下さい」

と、こういうことですね。根底的なゆるしがなければ、この祈りは成り立たない。これは先生のご自身の告白だと思います。

《キリストは

「立ちて祈る時、人を怨む事あらば免せ。これは天に在す汝らの父の、汝らの過失をゆるし給わんためなり」（マルコ11・25）
と同じ意味のことを論じておられる。》

「怨んでいることがあったら、ゆるしてやれ。これはあなた方の過ちをゆるしていただくためである。また、供物を祭壇にささげる時、兄弟との間にうらみがあるなら、和睦してから捧げよ」

ということ言っておられます。

椎名麟三（1911～1973 小説家）がこんなことを書いていました。

「この言葉を読んだら、供物を用意していても、とうとう供物が腐ってしまった。ゆるせないの、祭壇に持つていけない。もう持つていこう、もう持つていこうと思うあいだに腐ってしまったので、とうとう持つて行けなかった。人間というものはそのものだ」

ということを書いてありました（笑）。そのくらい人間はゆるすことが難しいということです。しかし、自分が徹底的にゆるされているところまでは、椎名麟三は書いてない。

《また「主の祈」のすぐあとに

「汝らもし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らをゆるし給わん。」（マタイ

6・14）

及びその反対の場合は「ゆるされない」（6・15）というキリストの言を、深くおもっべきである。》

そして、この「主の祈」の気持ちは「ゆるしたる」という完了形だろう、というふうに仰っています。

《罪の問題が解決されてある現実においてこそ、きよい、明るい開放的な、おそれなき親しい心で、神に祈れるのである。「これからゆるす」ではなく、「もうゆるしましたから」といって、わが胸が現に、わだかまりなきものとなっているのでなければならぬ。

兄弟と和睦をしてから捧物をするのと同じように。》

そして、こういう関係というのは、神さまとの関係、隣人との関係は、これはもの凄く大事なことであって、実は国際関係でも、社会の関係でも、職場の関係でも、みな同じな



んだと。この根源的な解決がなければ、本当の世界の平和はこない。社会の平和はこない、ということをおっしゃられる。

よく、階級闘争がありましたね、1950年からはまだ労働運動がはげしい頃でした。大学なんかでも、職場にいきますと、組合の人たちは、

「そんなキリスト教だの何だと言うよりもまず、自分たちが社会を変革しなければダメだ」

というようなことを言うわけです。宗教や信仰の問題よりもまず横の関係を正しくすることが大事だと言って、平和運動だとか何とかへ我々を招くわけです。良心的な人はもの凄く悩みます。クリスチャンの中で悩みます。今この運動に参加すべきなのか、それとも教会で祈っているべきなのか。教会でじつと祈っていて、世界は善くなるのだろうか。このジレンマに絶えず立たされた。けれども、先生はここではつきりと、

「根底にこれがなかったら、いかなる平和運動もむなし。それは偽りの平和で終わってしまう」

と仰るわけです。表面的には平和かもしれないけれども、一皮はいだら、その中で虎視眈眈と、あわよくば自分が覇権を握ろうという、これが国際関係です。今でもそうですよ。表面では握手しているようでも、腹の中では、いつ何かを奪い取ろうかという、そういう関係が国際社会ですから。狼のような世界です。だから、

「鳩のように素直で、また蛇のように賢かれ」

と言われたのは、そういうお気持ちからでしょう。

遠回りであるようでも、本当に根底的にゆるしあうということを世に広めていかないと、これは砂上の楼閣に終わる。サタンが笑っているだろう。ですから、イデオロギーではない。「平和だ、自由だ」という、そういう看板ではないということです。

《どうか、このサタンの術中に陥らぬように、ただ福音を実存することをのみつとめよう。福音を実存し宣教することが第一義であり、根源である。福音によるほかに世界の「平和」も「自由」もあり得ない。

世界の「にくしみ」を世界の「ゆるし」に転ぜしめる鍵は、正に「主の祈」のこのキリストの一句にかかっている。それはただ個人の小さな関係から始まる。社会社会とわめく現代教育の根底に、正しい人間の相互関係、即ち「ゆるし」の福音、罪のあがないの消息を示さねばならぬ。この意味においても、あらゆる基督者はその隣人に対して伝道の使命を負っている。》

●三重の現在

《さて我々が「ゆるされたる」者であることは、さきにも述べた如く現に、「ゆるされである」のであって、現に神の前に罪なき者として、恩寵の下に、自由と生命の現実



に置かれてあるのである。十字架の贖いの過去完了的ないし現在完了的角度に対して、我々が現に在る場合は、贖われてキリストの生命の中に在る現在である。この現在は「昨日も今日も永遠にかわりなく」(ヘブル13・8)在り給うキリストの永遠の今であって、それは終末的現在である。終末を今においてもつ時にのみ、それは永遠であって、現在時は終末的質性を有たなければ永遠とはいえないのである。》

ここからまた「終末」のことが出てきます。以下出てきますことを、ちよつとあらかじめ申しますと、これは先生の『即身即主』という1968年頃に関西の北摂高原でなされた、一時間ほどのお話でしたけれども、それが贖愛新書の第6号に収録されています。これは素晴らしい講筵でした。これはちゃんと先生の著作集(第三巻『無の神学』第9章「即身即主」)の中にあります。その中でハッキリ言っておられる。

「信仰・希望・愛」という、この三つをどうとらえるか。信仰というのは、過去に関わる。十字架の赦しという過去。過去が現在に迫ってきている。それから、希望というのは将来に関わります。聖国は向こうからやってくる。そして、愛。これは何か。頭上からキリストの光が切り込んで来ている。光が投げかけられてきている。愛の光が来ている。それが現在だ。生命だと。そして、それは聖霊の現在である。御霊にある現在です。御霊は過去を引き寄せて現在化し、将来を引き寄せて現在化し、そして、正に愛という現実の中に生かされる現在である。

だから、現在であるのは、その三重の質をもっている。十字架は過去のものでありながら、現在の赦しとなって私を今支えてくれているし、終末、聖国来臨は未来のことでありながら、現在に迫って来ている。そして現在化してくれる。そういうふうに、過去を現在に引き寄せ、未来を現在に引き寄せて来る、その源は御霊なんです。だから、御霊は過去も現在も将来も全部を包んでおられる。完全なものだと。そして、キリストの愛の光が御霊によって引き寄せられて、一人ひとりの中に愛が宿るんだと、そういうことを言っておられます。そのことが既にここに出てきてしまっているんですね。

●三つの光

「十字架の贖い」の過去完了的ないし現在完了的角度。それから「キリストの生命」が上からやってきます。「キリストの永遠の今」ということ。そして、「終末の光」が向こうから迫って来ます。そういうものに支えられているのが本当の「永遠の今」ということだという。

《「我キリストと共に十字架につけられたり。最早我生くるに非ず、キリストわが裏に在りて生き給うなり」(ガラテヤ2・20)

である。キリストと共に十字架につけられてもう生きているのではない、という告白は、つねに現在完了面である。「キリストわが裏に在りて生くるなり」という現在面にあればこそ、我らは生くるのであって、我らの信仰の生の事態は十字架の一点をみつめて



いるところにあるのではなく、キリストの生命の中に「ゆるし」を通して「いのち」に置かれてある現実である。

これが、先程言いました、無教會的ないわば十字架を、過去の十字架を仰ぎ見ている、それに止まら^{とど}ない。むしろ現在、愛に生かされている。十字架を土台として、御霊の現在、御霊の愛の中に、生命の中に生かされて、未来に向かって邁進^{まいしん}して行く、驀進^{ばくしん}していくという、そちらの面にむしろ力点を置きたい。それでいて、十字架を決してないがしろにしない。十字架が現在を担っているんだという、そういう受けとり方です。それこそが、

「昔在^いまし、今在^{いま}まし、後来^{きた}り給う」主キリストは、私の背後から完了的角度から私に十字架の光、罪のゆるしの光を浴びせつつ在り給う。頭上真上から、現在の時角から、垂直に聖霊の光を浴びせつつ、前方から、未来時終末的角度からは、再臨の光を浴びせつつあり給う。かくして、私を三重の光で囲み、且つ抱いて力を与え給う。凄いですね。

「御霊のわが主は わが身を抱き

十字架に耐えうる 力を賜う」（召団讃歌B2「使徒らの昔を」）

ということ。

これがわが霊なるキリストである。讃^ほむべき哉、主の栄光！ これこそ我らの信仰の現実である。この三つの光を浴びる我らの恩寵の現実存は、真上からの現在時的聖霊の光を最も現実として受けとっている。それは

「汝らは死にたる者にして、その生命はキリストと共に神の中に隠れ在り。我らの生命なるキリストの現われ給うとき、汝らも之と共に栄光の中に現われん」（コロ

サイ3・3〜4）

という、現在より歴史の終末に向かって進んでやまぬ現実である。かかる現実に置かれている恩寵の現実存を想うとき、「主の祈」は「ゆるし」の完了を負っている現実、隣人を「ゆるし」たる現実においてこそ、可能なのである。キリストはそのような現実にあつて祈れよ、と言われる。

そして、我らは、日々にならうようにしてキリストにゆるされつつ、過去の罪を「レーテの川」に投げ棄てていただいて、神も罪を顧みたまわず、我もよくよかえりみず、ただキリストの限りなき「ゆるし」の恩寵を感謝しつつ、キリストの限りなき「いのち」の現実に生きるのである。これが我らの現実である。

この言葉もまた私は好きでした。日々にならうようにしてキリストにゆるされ、過去の罪を「レーテの川」に投げ棄てていただいて、神も罪を顧みたまわれない。神さまも我々のことをもう思われな^いい。私も自分のことをよくよ思わ^ない。ただキリストの限りなき「ゆるし」、それをいつもいただいている。そして、今、御霊の「いのち」の現実を生きぬく。これが私たちの現実だと。



パウロと共に再び言つ。

「最早われ生くるに非ず、キリストわがうちに在りて生き給う！」(ガラテヤ2・20)』

先生の、我々がここで聞いているテープ(聖書講筵の録音)はこの最後の方の角度がもの凄く出ていますね。現在の姿、御霊にある現在。「主よ！」という一言の祈りでもう他に何も祈りはないと。「もう、ゆるしたる」とか、そんなことでさえふつとんでいるような姿です。でも、先生は繰り返し言われました。

「本当に十字架の下でだけ、我々は互いに握手ができる。十字架の下に来よう。そこで抱き合おう。そこで握手しよう」

と言われた。それは今も先生の天上にある祈りだと思っています。

「いろいろな所へ散らばって行つた兄弟姉妹方、どうぞ、場所はどこであつてもいい。心の中では本当に一つであつてほしい。祈りの中で一つであつてほしい。わだかまりは捨ててほしい。ねがわくば、帰って来てほしい。祈りを共にしようではないか」

と。そういう先生の祈りが聞こえるような気がいたします。

(参考 本文) キリスト告白録第3巻『聖意体現』

「聖意体現」——実存の源なる「主の祈」、私の信仰告白として(マタイ6・9～13)

1959年12月 聖誕節 小池 辰雄

●五 今日一生

「日毎の我らの糧を今日も我らに与えたまえ」(マタイ6・11)

「主の祈」は父神に対する呼びかけを以て始まり、その神に対する頌栄をもつて終わる。そして、前半において聖名と聖国と聖意のため、換言すれば、「汝」なる神に関して祈り、後半において「我ら」の身体および靈魂の生活、および実存の問題について、換言すれば、「我ら」なる人間に関して祈る。

さて私たちは今や、その後半にはいる。私はここに、第11節の「日用の」と訳されているエピウシオン(epiousion)という語を「来る日毎の」と訳したい。学問上難解の語であるが、それらの「研究」は、私が今ここに「告白」として述べるのに直接のかかわりをもたないから、紹介することを略する。「今日も」とはつきり祈られているところを見れば、この祈は朝起きがけに祈られるべきものとして、示されたと見るのが自然である。詩篇第3篇と共に、



「われいねて眠りまた目さめたり。ヤハウエーわれを支えたまえばなり。」(詩篇3・5、原典3:6)

と、一夜を神のみ懷に抱かれて安らかな眠りから感謝して起きあがった者が祈る祈である。即ち、一日の馳場を走らんとするにあたって、この「主の祈」が、しずかに深くあらたに祈られる。そして、祈ったように、いのちがけで、一日路を歩き貫く。夕には、詩篇第4篇と共に、

「われ平安の中に、いねまた眠らん、われを独りにて安泰やすらかにおらしむる者は汝なり。」

(詩篇4:8、原典4:9)

と祈って、一切の憂いもなやみも、喜びも悲しみも、われそのものと諸共に、神に投げかけ、空っぽになって、いとも平安(シャーローム)に、神の「永遠のみ腕」(申33・27)にやすらうのである。まことにその如きが、我らの一日でありたい。然らば我らは、一日一日を一生として暮らすこよなき生き方ができるであろう。どんなに涙に暮れることがあるうとも、そのように起きそのように寝る一日一日であるとき、それは真に、内村鑑三先生が言われた「一日一生」が実現して行くであろう。そのときその人は、いつどこで斃たおれようとも、どんなに惨憺たる失敗を喫きつしようとも、どんなに人々に棄てられようとも、可なりである。神はその祈とその心根と世にも惨めなるその努力のゆえに、彼を嘉よみし給うであろう。神の観みるところは、人の判断とは異なる。倒れても、躓ついても、一日路の足跡を印して、前進するのみである。

この「今日」という語に、重大な重みがある。この語は文法的には第11節だけのものではあるが、その響きはそのあとの「我ら」にかかわるいのり全体にかかっている。そして、この「今日」の響きは更に「主の祈」の前半にまで反響返こだましているのである。それは「主の祈」はまことの精神において、来る朝ごとの新たな祈であるからである。つねに「今日」に関わる一日の祈であるからである。我らの毎日は、終末の神の国の到来に直面している。神の国の迫りに向かつての終末的現在の一日一日である。歴史というものは、人間の側の相対面から観て、いわゆる歴史性において、社会の現実を把握しこれに対処して行く面のあることを知る。しかし、私はそのような歴史面がつねに神の審判と救贖の終末面に直面していることを知る。この終末面が歴史面をある角度から、ある次元から、ある質的浸透力を以て支えているのでなければ、歴史性そのものも喪失されたものとなるのを知る。

神の国はこの祈の前半でも告白したように、二千年前のイエス、パウロ、ペテロ、ヨハネの時と同様に迫っている。イエスの宣教の第一声は二十世紀の今日、まったくその通りである。二千年の歴史というものは、神の国の到来という畏おそるべき預言と約束のもとにおいてのみ、その脚光を浴びてのみ、歴史たり得ているのである。もしこれなくば、歴史はまったく混沌であり、不合理と矛盾と無意義そのものであつて、そこに現じたすべては芝居となる。天国と地獄の中間を動いているこの「不安」と「問題」の世界歴史は、中間という



相対性を天国と地獄という絶対性面によって性格づけられているのである。しかも、その相対性の中に終末性をそれゆえにこそ付与されているのである。もし、天国をはずし、地獄をはずしたら、この歴史の性格は、喪失され、宙に浮沈して、ゆくところを知らず、意義を失い、処を失う。それは、ナンセンスそのものとなり、人類は狂死し、歴史は空しく、となる。

「空の空なるかな、すべて空なり」(伝道の書1:2)

しかしながら、この歴史面が深刻なる大劇史であるのは、天国的光と地獄的闇の明暗の交錯するただなかに、神の顕然また隠然たる靈法の中に支えられているからである。誰か人類の歴史を完全に解明し得んや。これは永遠に不可能である。その解明の鍵は、独り神のみが握っていまし給う。そして、キリストは現に今、天上に在って、その権をゆだねられて在まし給う(コロサイ1:15-17)。

人一人の生涯は、これをいかなる卓抜なる伝記記者といえども、これを完全に描き、その意義を究明しえない。そのように、人間の実存に関わる事態は、神の前におごそかなことであつて、人が他人の実存を軽々しく云々し得るものではない。そして、我らはみずからの実存すらも知りつくしえない。そして、我らの生涯はそのような偉大なる神の歴史の一環として、時代史の一コマ一コマをなす因子である。私たちの生涯の一日一日がそのような終末性において、非連続の連続として迎えられ、また送られてゆく。

それゆえに、「エピウーシオン」という新約聖書で唯この「主の祈」(ルカ伝も然り)にしか出て来ない語を、以上の如きのつびきならぬ角度からとらえるときに、これを「来る日ごとの」と訳して可いのである。神の国を来たらしめんとして、神の国の永遠時が、終末の世界から来る日である。何たる祝福と希望の語であらう。そういう一日一日が送られて来る。そのようにして、「来る日ごとの」我らの糧を「今日も」と祈るとき、終末的現在としての今日に現実^{うんぬん}に在らしめられているのを感じる。のみならず、「今日」という時は、聖書の中から「元始」としてまた「終末」として送られて来たことを。

イエスが、この短い「主の祈」の中の人間の側の祈において、特にパンの問題を先ず祈り出でていられることは、なんと思ひやり深いことであらう。地上の問題は、二十世紀の今日、その最大なるものがパンの問題、経済問題であるが如くである。個人の幸福も、社会の福祉も、国家の昌隆や安泰も、世界の平和問題も、所詮、パンの問題に帰着するが如くである。事実パンの問題は現実の最も深刻な問題の一つたることを失われない。

イエスが御霊にみちびかれて曠野に往かれたとき、サタンに試みられた靈的事件において、試惑者が最初に口を開いたのは、パンの問題であつた。そのときのイエスの答はあまりにも有名である。

「『人のいのちはパンだけに由らない、神の口から出るすべての言に由る』と書いてあるではないか」



と、申命記8・3の句を引っぱつての応酬であつた。サタンはパンの問題が人間の弱味をつくのにも最も適していることを知っている。魂は飢えていても、その飢えを知らないでいる。しかし、肉体は飢えると、その飢えは死をおびやかすほどに切実であるからである。イエスも曠野の断食のあげく、いかに肉体の飢渴が深刻であり、パンの問題が切実であるかを、つぶさに体験された。その深刻な現実のどん底において、このサタンの声がいかに彼の魂の牙城を揺るがすかを覚えられたであらう。しかし、彼はそのときもなおしずかに力強く、パンも大切な糧^{かて}だが神の言こそ人間存在の根底をささえるものである、との意をもつて答へ給うた。そうして、石をパンに変えるような聖旨に反した奇蹟を、こぼまれたのである。

神の言が我らの全実存を支配して行くこと、これ人生と世界の第一義問題である。さればこそ、

「まず神の国と神の義とを求めよ、然らばすべてこれらのものは汝らに加えられるべし。」(マタイ6・33)

と言われたのであり、

「天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一点二画も廃ることなく、ことごとく全うせらるべし。」(マタイ5・18)

と言ひ、

「汝らの義、学者パリサイ人にまさらずば天国に入ること能わず。」(マタイ5・20)

と言われ、

「汝心を尽し精神を尽し思を尽して主なる汝の神を愛すべし。おのれの如く汝の隣人を愛すべし。律法全体と預言者とはこの二つの誠命に拠るなり。」(マタイ22・37)

40

とも言われたのであつた。さればこそ「主の祈」も、その前半において、神の聖名と聖国と聖旨が、我らの日々の実存の根底として、祈られているのである。

しかもなお、イエスは霊肉不可離の実体としての私たちの存在をかえりみて、糧の問題のために祈ることを、罪の問題よりも先にゆるして居られる思いやりの深さを、思わざるを得ない。神学者たる当時のパリサイ的教法師たちであつたら、これは順序が逆である、まず罪の解決を先に祈らねばならぬ、と青すじを立てて論議するであらう。そこが神の子、み霊の人とあたまの神学者とのちがいである。学者やパリサイ人が幾人かかつて来ても、このみ霊の人に罪の問題で太刀打ちできるものではない。彼は罪の論議よりも、罪そのものを負ふことのできる人であつたから。

「涙交^{まじ}えてパンをあじわひ

憂悶^{うれい}の幾夜を臥床^{ふしど}のなかに

泣き明^{なれ}かしたる体験^{たいめし}なければ

汝らは知れず、天つ力よ」



ゲーテが琴弾^ひきをして歌わしめた歌の一節である。この歌の主旨（モチーフ）はともあれ、正直に貧しく生活する者にとつて、日常の糧はこのような危機に曝される。子らに与えるとも、みずから食事^{はす}するときを外して断食し、「何食わぬ顔」の反対に、「何か食った顔」をして憂悶を飲みく^{ためし}だした体験なければ、またこれに類する思い出なくば、キリストがかく祈ることを教え給うた愛に泣くことはできないであろう。

「よそびとのパーネの味のいかに苦^{にが}きか

よそびとの階段^{きざはし}を降り昇りする

道いかにつらきかを身に閲^{けみ}すべし」（ダンテ・天国17・58〜60〔藻風訳〕）

流浪の旅幾十年を、「枕するところなき人の子」の勇ましき僕として戦い抜き、「神曲」一卷を以て世に對し、神に控訴した詩人は、苦飯^{にがめし}の味を嘗^なめ尽くしたのであった。このダントエを特愛したわが恩師藤井武先生が、いかに神信頼のその日暮らし^なをしておられたかを、私はつづきにこの目を以て見て知っている。先生もまた

「何を食い、何を飲み、何を着ん^はとて思い煩うな。……明日は明日みずから思い煩

わん、一日の苦勞は一日にて足れり。」（マタイ6・31〜34）

を実存していた人であつた。

いうまでもなく、イエス御自身、徹底的に天父に信頼して一日一日を歩かれ、この祈を祈として生きておられた。そして、その真意は実に信頼の生活であつて、ただパンの問題というのではない。現実^じに切実な問題であるパンのことであるからこそ、それが功利となり打算となり私欲となる罪性を誘発しやすい。このことが極めて大なる事態であればこそ、イエスは神信頼の魂の在り方をこの祈で示しておられるのである。されば、イエスの深い思いやりには、また深い論しが秘められているのである。神は現在し給う。その現在面において神に在る生活。その日その日を、神の御はからいのもとに生かしめられてゆく生活。かくして、パンの問題もまた、じつはそれ自体が具体的^きに信仰問題に関わる。否、じつに信仰問題たり得るのである。信仰とは実に実存にかかわる事態であつて、単にあたまのこと、觀念のことでないことを、この一事からも知らしめられるわけである。

そのようにして神に信頼し、神に在り、キリストに在つて生きる者には、もう一つ高次の食物が与えられる。それは何だろう。

「我には汝らの知らぬ我が食する食物あり」

とイエスが言われた食物、即ち

「われをつかわし給^{みこころ}える者の御意^{みわざ}を行^みいその御業^{みわざ}をなしとぐるは、これわが食物なり。」（ヨハネ4・34）

といわれたものである。勿論イエスの場合は、その「御業をなしとぐる」と言われたとき、特別な意味がふくまれていて、罪びとのなしとげ得ざるものであつた。即ち世の救贖の大業であつた。しかし、我らにもまたそのような食物がある。即ち、神の聖意をなすという



実存である。これなくして我らの魂は涸渇してしまうのである。

魂は神の聖言を喰って生きる。書かれたる聖書の言は神の言に相違ないが、それが喰われる聖言となるためには、霊をもつて受けとらなければならない。

「儀文は殺し霊は活かす」（コリント後書3・6）

のである。この意味において、霊の糧は聖言であつて、

「人の生くるは……神の口より、いづるすべての言に由る」（マタイ4・4）

わけである。肉体が食物を得て活動しなければ、消化せず不健康である如く、魂も聖言を喰って生きなければ不健全である。かくして、聖旨を実存することが樂しき食物となる。魂はそのとき健全であるからである。糧も財も「来る日ごと」に（メンゲはこれを「さしあたり間に合うだけの」と訳している。意をとらえた味のある訳である）神に与えられ、貯蔵米も蓄財もない生き方をしようとする者は、その魂が同時に、貧しき魂である証拠である。彼は強き信仰を貯えようとはしない。彼においては、信仰もまた空っぽである。いざというとき、空手術を身に体している人が、武器をもつ者よりも強いように、空っぽの信仰はかえって強いのである。

「主、キリストよ！」との一念のもとに、直ちにキリストが入り来つて生きる空っぽな人間でありたい。またキリストの前にぶつぶつぶれた人間が、どうして何者かであろうとしようか。とんでもない。それこそ傲慢である。何もありません！と、それでこそ私は本当に樂である。聖霊は空っぽのところに来て宿り給い、留まり給う。信仰というものは、それを蓄積しなければならないのであつたら、律法への逆戻りにほかならない。

かく、来る日ごとの肉の糧が霊の糧の問題につらなり、肉の糧を正しく食う者は同時にそこに霊の糧を食うことができ、霊の実存が肉の生存を真に生かすことになるのである。奇しきは「神の智慧」である（ロマ11・33、コリント前2・7）。

●六 贖罪赦免

「我らに負債ある者を我らのゆるしたる如く、我らの負債をもゆるし給え」（マタイ6・12）

前述したように、「糧」に関する祈は直接には肉体の死活に関わることであつたが、この「負債」に関する祈は直ちに靈魂の存亡に関わる祈である。「主の祈」の前半において、その中心部が「汝の聖意をなし遂げたまえ」にあるとするなら、この後半に於ける核心部は「我らの負債をもゆるし給え」にあるといわねばならぬ。「主の祈」は正に二焦点をもつ楕円形の如きである。それよりもむしろ、同円二中心といったようなものである。しかも、その二つは相かきなり、金的の前面は「汝の意志の成就」であり、金的の背面は「我らの負債（罪過）の赦免」である。

さて我らがこの祈を読んで、ぶつかる躓きの石は、原文では後半になっている、



「我らに負債ある者を我らのゆるした如く」

の句である。そして、この一句は実に「主の祈」の「試練を経たる石、貴き隅石、堅く据えたる石、シオンの石、土台」(イザヤ28・16)である。この「主の祈」がみ霊の現実において祈られんがためには、是非とも通過しなければならない関門である。それはなにゆえであらうか。我らが神に祈るときに、おのれに「我執我欲」(ヤコブ4・1)があつては駄目である。隣人との関係に「怨恨、紛争、嫉妬、憤怒、分離」(ガラテヤ5・20)があつては駄目である。隣人の我らに対する「負債」とは言うまでもなく、ただ金銭関係のことを言っているのではなく、我らに対しておかした罪過を言う。それをゆるすことなくして、

「我らの負債(罪過)をゆるしたまえ」

の祈はできない。

ところで、この「ゆるし」ははたして可能であらうか。表面的にはゆるすことはあつても、真に「ゆるす」ということは、我らが真に「ゆるされた」ことなくしては、できない内的行為である。我らの罪過はしからば、いつ、いずこにおいて、真に、根源的に、根底から、ゆるされたのであるか。幸いなるかな、我ら新約の時代に生きる者は、キリストの十字架によってその罪は完全に処分された。

「^{うらみ}怒なるへだての中垣は^{なかぎ}こぼたれた。」(エペソ2・15)

「十字架によりて怒は滅ぼされた。」(エペソ2・16)

のである。神との関係において、「怒りの子ら」であつた我らは、「平和の子ら」「光の子ら」にされたのである。「悪魔の子」から「神の子」にされたのである(ヨハネ第一書3・10)。我らはもとその「不虔と不義」の、神に対し人に対しての、縦横の罪過により、「神の怒」(ロマ1・18)の下にあつた。そして、神の怒からは、今でももし十字架の下にいないならば、まぬがれ得ない罪びとである。死に至るまでそうである。

神は我ら罪びとを深くあわれみ給う。それは大悲霊願的なあわれみである。深くして潔い完全なる救へのあわれみである。かのキリストの十字架において、その極致として、唯一回的に決定的に、最も具体的に、神のゆるしをあらわしたもうたのである。神の怒は神のゆるしに、キリストにおいて転ぜられた。そこに神の怒の中にかくされていた神の深いあわれみがあらわれた。神の怒(義)は神のあわれみ(愛)の「異なるわざ」(イザヤ28・21)であるとは、ルッターの指摘した通りである。かかる十字架による罪のあがないが、神のゆるしであつて、単なるゆるしではない。そのようにして贖いゆるされた者である、というのが、我らの信仰の現実である。我らはかく、十字架の啓示の事実によって、即ち恩寵の力によつて罪「ゆるされた者」という完了態にある。それを現実に信受して「ゆるされてある」者となつた。そのような現実を受けとること、突入することが、信仰であり、信行であり、信交である。かく根底からゆるされた恩寵の中にある時にして、はじめて、我らは隣人の罪過をゆるすことができる。勿論、人の罪をゆるし得る者は神のみである。キリストのみである。我



らが「ゆるす」という意味は、むしろ隣人の我に対する関係において、その罪過の面をゆるして見ないという気持ちである。

「このように神にゆるされた私なんだから、君、心配は要らん。みんな君のやったことはゆるすよ、ゆるしたよ。僕のもゆるしてくれたまえ！」

という心根である(しかし、どんなに人間相互でゆるしあっても、根底的なゆるしを神から直接キリストにおいて受けない限り、駄目である)。

かくして、ここに「罪過」と言わず「負債^{おいめ}」といって、ある一つの具体的な言であらわして居られるところに味がある。イエスは罪の問題をよく、「負債」のたとえ話で示された。ルカ伝第7章の「罪ある一人の女」の場合においても、「デナリ五百、デナリ五十の負債」(ルカ7・41)の話がもちだされている。そして、我らは

「償^{つぐぬ}いかたなければ、債主^{かしぬし}この二人を共に免^{ゆる}せり。」(ルカ7・42)

という言葉に注目しなければならない。我らはすべて、例外なく、神に対して「償^{つぐぬ}いがたなき」罪びとである。自ら何とも償^{つぐぬ}いがたなき者を、キリストが罪の「証書を塗りけし、これを中間よりとりて十字架につけて」くださったのである(コロサイ2・13・15)。かくて償われ、贖われたのである(マタイ18・21・35の「悪しき家来」のたとえ話も参照)。

そのようにして「ゆるされた」我らであるから、隣人をその十字架の恩寵の下で、「ゆるす」ことが初めてできる(ルカ伝では「ゆるしたる如く」は「ゆるす如く」である)。そのように

「ゆるしたる如く、また現にゆるす如く我らの負債(罪過)をもゆるし給え」

である。キリストは

「立ちて祈る時、人を怨む事あらば免^{ゆる}せ。これは天に在^{いま}す汝らの父の、汝らの過失^{あやまち}をゆるし給わんためなり」(マルコ11・25)

と同じ意味のことを論じておられる。また供物を祭壇にささげる時、兄弟との間にうらみがあるなら、和睦してから捧げよ、ということを誠めておられるのも同じ心である(マタイ5・23・26参照)。また「主の祈^{あやまち}」のすぐあとに

「汝らもし人の過失^{あやまち}を免^{ゆる}さば、汝らの天の父も汝らをゆるし給わん。」(マタイ6・14)

及びその反対の場合は「ゆるされない」(6・15)というキリストの言を、深くおもうべきである。

マタイ伝の如く「ゆるしたる」(ギリシア語のアオリスト)でも、ルカ伝の如く「ゆるす」(現在形)でも帰するところは同じと思うが、イエスの気持ちはおそらくこの「ゆるしたる」の方に重点がかかっていると思われる。罪の問題が解決されてある現実においてこそ、きよい、明るい開放的な、おそれなき親しい心で、神に祈れるのである。「これからゆるす」ではなく、「もうゆるしましたから」といって、わが胸が現に、わだかまりなきものとなっている、なければならない。兄弟と和睦をしてから捧物をするのと同じように。



かくして、我らは互いに「ゆるす」ことが、如何に神の相互の平和を来たらしむるに重要なかなめであるかを知る。個人関係、社会問題、国際関係等々すべて然らざるなしである。自己の見解を絶対化し、義として他を審くのは、パリサイ精神である。キリストが最も攻撃されたのはこのパリサイ精神であった。それはこの「主の祈」の心根とは正反対の精神である。現在はいく世界のエデオロギーの衝突をいう。しかし、人間はエデオロギーの化物ではないはずである。それならむしろ簡単である。ところが、現実の人間はもっと複雑な化物である。「欲」の化物(ヤコブ書第3、4章を参照)が「徒党」を組んで「エデオロギー」を叫ぶ。現実をじつはどうにも解決することのできない看板をふりかざして「平和」だ「自由」だときわぎたてる。どこかでサタンがせせら笑っているようである。どうか、このサタンの術中に陥らぬように、ただ福音を実存することをみつとめよう。福音を実存し宣教することが第一義であり、根源である。福音によるほかに世界の「平和」も「自由」もあり得ない。

世界の「にくしみ」を世界の「ゆるし」に転ぜしめる鍵は、正に「主の祈」のこのキリストの一句にかかっている。それはただ個人の小さな関係から始まる。社会社会とわめく現代教育の根底に、正しい人間の相互関係、即ち「ゆるし」の福音、罪のあがないの消息を示さねばならぬ。この意味においても、あらゆる基督者はその隣人に対して伝道の使命を負っている。

さて我らが「ゆるされたる」者であることは、さきにも述べた如く現に、「ゆるされてある」のであつて、現に神の前に罪なき者として、恩寵の下に、自由と生命の現実置かれてあるのである。十字架の贖いの過去完了的ないし現在完了的角度(あるいは過去分詞的とも言い得る)に対して、我らが現に在る場合は、贖われてキリストの生命の中に在る現在である。この現在は「昨日も今日も永遠にかわりなく」(ヘブル13・8)在り給うキリストの永遠の今であつて、それは終末的現在である。終末を今においてもつ時にのみ、それは永遠であつて、現在時は終末的質性を有たなければ永遠とはいえないのである。

そのような現在が、パウロの、

「我キリストと共に十字架につけられたり。最早^{もはや}我生くるに非ず、キリストわが衷^{うち}に在りて生き給うなり。」(ガラテヤ2・20)

である。キリストと共に十字架につけられてもう生きているのではない、という告白は、つねに現在完了面である。「キリストわが衷に在りて生くるなり」という現在面にあればこそ、我らは生くるのであつて、我らの信仰の生の事態は十字架の一点をみつめているところにあるのではなく、キリストの生命の中に「ゆるし」を通して「いのち」に置かれてある現実である。

「昔在まし、今在まし、後来り給う」主キリストは、私の背後から完了的角度から私に十字架の光、罪のゆるしの光を浴びせつつ在り給う。頭上真上から、現在の角度からは、垂



直に聖霊の光を浴びせつつ、前方から、未来時間的終末的角度からは、再臨の光を浴びせつつあり給う。かくして、私を三重の光で囲み、且つ抱いて力を与え給う。これがわが霊なるキリストである。讃むべき哉、主の栄光！ これこそ我らの信仰の現実である。この三つの光を浴びる我らの恩寵の現実存は、真上からの現在時的聖霊の光を最も現実として受けとっている。それは、

「汝らは死にたる者にして、その生命はキリストと共に神の中に隠れ在り。我らの生命なるキリストの現われ給うとき、汝らも之と共に栄光の中に現われん。」（コロサイ3:3〜4）

という、現在より歴史の終末に向かって進んでやまぬ現実である。かかる現実に置かれている恩寵の現実存を想うとき、「主の祈」は「ゆるし」の完了を負っている現実、隣人を「ゆるし」たる現実においてこそ、可能なのである。キリストはそのような現実にあつて、祈れよ、と言われる。

そして、我らは、日々にそのようにしてキリストにゆるされつつ、過去の罪を「レーテの川」に投げ棄てていただいて（「神曲」の煉獄第31曲参照）、神も罪を顧みたまわず、我もくよくよかえりみず、ただキリストの限りなき「ゆるし」の恩寵を感謝しつつ、キリストの限りなき「いのち」の現実に生きるのである。これが我らの現実である。パウロと共に再び言う。

「最早われ生くるに非ず、キリストわがうちに在りて生き給う！」（ガラテヤ2:20）

